

飛騨荘川の里と白川郷荻町集落訪問記。

岡哲文

一昨年、五箇山の麦屋祭りから帰宅して、偶々飛騨荘川を紹介したホームページを発見した。その中で荘川の里という野外博物館が紹介されており、白川郷の合掌造りとは異なった、荘川合掌造りの民家が移築してある。という記事が目にとまった。近くには桜香（おうか）の湯とお食事処、そばの里もある。

アクセス方法をホームページで調べたら、飛騨高山からバスがあるそうなので、それに乗ることにして、荘川の里に近い民宿を観光協会に教えて頂いた。濃飛バス高山営業所から荘川線の時刻表をFAXしてもらってびっくり、飛騨高山から荘川の里まで行くバスは一日に三本しかない。然も軽く一時間以上は乗車する。かなりの山奥なのかもしれないと想像した。宿泊先を荘川の里に一番近い、民宿中島に決定して電話で予約を入れ、飛騨高山からバスで来る旨を女将さんに申し上げたら、バスで来るのですかと驚かれた。実際にバスで行ってみて、この言葉を思い知ることとなった。

更に近くの「道の駅荘川」から、白川郷行の高速バスが一日一往復しているという情報を手に入れたから、ならば五箇山への和紙祭りの前日に、荘川く白川郷を経由して行こうと決めた。旅行作家協会の世界遺産部会に入会して、部長の細田さんから白川郷の和田家の当主と面識があることを伺った。また昨年私が大阪の日本民家集落博物館を取材した時に対応していただいた山城様の知り合いが白川郷で「鄙」という喫茶店を営んでいるという話を伺ったので、今年は白川郷の合掌造り集落をゆっくり見てこようと考えた。

更に荘川の合掌造りが、横浜の「三溪園」にも移築されている情報を得たから、旅から帰宅してから三溪園にも取材依頼をした。

飛騨高山発の荘川線のバスが一二時三〇分に出るため、それに間に合うには、新宿駅八時発の飛騨高山行高速バスに乗らないと間に合わないから、当日はものすごく早い時間に起床して、大急ぎで新宿駅西口の高速バスターミナルへ向かった。バスは定刻通りに飛騨高山に到着し、余裕を持って荘川行きバスに乗車できた。バスは市街地を抜けるとどんどん山の中に入り、道の駅荘川を経由してしばらく乗ること約一時間少して荘川の里のバス停に到着した。バス停は駐車場内にあり、宿の方から車で来てもらっていた。早速宿に泊まり、翌日荘川の里に行くことに決定した。

尚、当日は水曜日で、荘川の里は休園日だったが、宿の女将さんが当園で働いていたために、特別に開園してもらい、独りでゆっくり見て回ることができた。宿

から歩いて行くと、正門ではなくて裏口から入れるため、一番そこから近い「旧渡辺家」から見ていくことにする。当園内に移築されている茅葺きの民家は、いずれも寄棟式入母屋合掌造りといい、白川郷や五箇山の切妻屋根とは異なっており、「鼻小屋」という障子や板戸をあてる採光のための窓が一つついていてだけである。然し屋根裏に登れば、白川郷や五箇山のそれと同じように、かつて行われていた労働やあるいは使われていた民具が沢山展示しており、やはりなにかしらの影響は受けていたのかもしれないと思えた。荘川地区も白川郷、五箇山と同じく浄土真宗の盛んな土地であり、古民家には金箔の大きな仏壇があった。

旧渡辺家は、一九七四年（昭和四九）十二月十三日に高山市の文化財に指定された。白川郷野々俣（ののまた 現荘川町）より一九七二（昭和四七）に当園に移築された。囲炉裏、でい、仏間、寝床と台所の四つ間取りで、でいから囲炉裏に通じる縁側には短歌が書かれた短冊みたいなのが沢山飾ってあった。

旧渡辺家をはじめとする古民家は、いずれも屋根に苔が生えていたり、屋根をふき替えてから相当年月が経っているように見受けられた。木製の壁も剥げかけていたのが目に入った。



渡辺家外観、浄土真宗特有の大きな仏壇、二階の屋根裏の生活民具。

旧渡辺家と並んで建つのが旧木下家。家の前には池があつて橋が架かっており、橋の上から眺められるようになっていいる。入口の前には水車が置かれている。この木下家も高山市の文化財で、一九七四年（昭和四九）十二月一三日に指定された。白川郷町屋村（現荘川町）から一九七二年（昭和四七）にこの園内に移築された。入口を入れて囲炉裏のある部屋で一番目につくのは、昔の手回し式の電話である。（勿論今では使えない）。この家も四つ間取りで、縁側に機織り機が置かれている。更に私が訪問した当時は写真家、松田久の写真展が開催されて、沢山の東日本大震災を撮影した作品が展示されていた。



旧木下家の苔むした屋根。手回し式電話。展示してあった民具の数々。

旧木下家の近くに宝蔵寺庫裏（ほうぞうじくり）がある。高山市の文化財に指定されたのは一九七一年（昭和四六）一〇月八日。白川郷新湊村（あらぶちむら現荘川町新湊）にあり、式台玄関付きの上流民家の代表的な建物である。天文・文化年間に火災で焼失し、一八〇九年（文化六）に再建し、一九七七年（昭和五二）に当地へ移築された。玄関を入るとガラスケースの中にカラフルな雛人形が沢山展示されている。それ以外にもお櫃、算盤、煙管なども展示されている。旧渡辺家や旧木下家と違うことは、ここには着物を着た人形が部屋に置かれ、昔の生活を再現しているのに特徴がある。



宝蔵寺庫裏。囲炉裏前に置かれている父娘の人形と、仕事をする母親人形。

園内には庄川を挟んでふれあい橋を渡った側に民俗資料館やふれあいの館等があるが、休園日なのでそこは開いてなくて、他の旧三島家と山下家を見る。両家はいずれも瓦屋根である。旧三島家住宅は、江戸時代の明和、安永、天明にかけて飛騨一円で起きた百姓一揆「大原騒動」の義民上木甚兵衛自賢（うわきしん

べえよりかた)の生家で、大原騒動でただ一人農民側に味方したために伊豆七島新島へ流罪にされ、甚兵衛の看病のために新島へ渡航した勘左衛門の家でもある。

一通り見終わって、時刻はお昼になった。実は荘川の里についてネットで調べていた時に、近くに「そばの里荘川」があるとの記事を知ったため、そこでお昼にしよう決めていた。宿の女将さんに行き方を教えてもらったら、国道一五八号線を白川郷方面に歩いてすぐ、大きな水車が目印だと教えてもらった。園を出て、言われたとおりに道を歩くと、そんなにかからずに巨大な五連水車が回っているのが目に入った。(直径は十三メートル。この水車を利用してそばを製粉している。)これだけ大きくて沢山の水車が一斉に回っているのは初めて見た。やはり物珍しいのか、水車の前で写真撮影をしている人がいた。



巨大水車に四台が連なっている。そばの里荘川の外観とシンプルな味のそば。

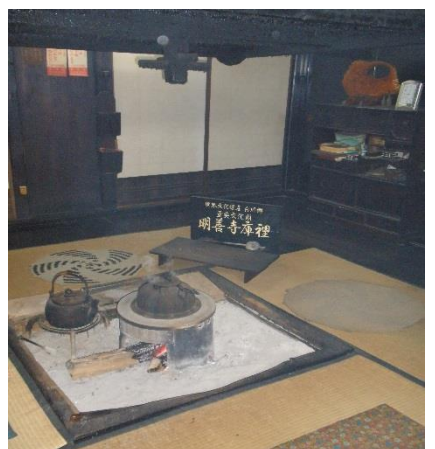
私が訪問した時期は、飛騨荘川新そば祭りの期間中で、荘川内の五軒のそば屋でざる蕎麦一食六〇〇円で提供するイベントを開催していた。店内で偶々、カメラクルーと若い女性が取材をしているのを目撃した。確かに味が良くて、もううかつに変なそばを食べたくなくなる。ここでは他にもそば打ち体験ができる。

そばを食べ終わってから、国道を今度は荘川の里の方へ戻り、そのまま通過して道の駅荘川へ行く。道の駅荘川内に桜香(おうか)の湯という温泉施設が併設されているので入ることにした。前回の富山の記事でも触れたけれども、一〇月だというのに、まるで夏みたいな暑さで長袖しか持ってこなかったから、汗だくで大変なことになっていた。明日、白川郷方面へ行く高速バスはここに停車する。ゆつくり温泉に浸かって汗を流した。道の駅だからなのか、昼にもかかわらず利用客がかなり沢山いた。

翌日、九時に宿をチェックアウトして道の駅莊川に向かった。白川郷行の高速バスの時間は十一時頃だから、温泉にでも入ろうと思っていたら、温泉は定休日、レストランも閉まっていた。仕方がないから道の駅莊川内のお土産屋さんとかを見ながら時間を潰した。定刻から少し遅れてようやくバスが到着した。このバスは名古屋から出ており、自由席で、途中から乗車した場合は降車時に料金を払う仕組みになっている。車内は結構人が乗っていた。バスは御母衣ダムを経由して白川郷へと向かう。御母衣ダム建設により移築された合掌造り民家が荻町にある。また白川郷の手前に「遠山家」という大きな合掌造り民家があった。是非来年訪問しようと思った。

白川郷荻町集落内に総合案内「であいの館」の前にバスターミナルになっており、高速バスは全てここに停車する。ここから近くの野外博物館合掌造り民家園を見るも可、であい橋を歩いて荻町集落内を見るも可である。荻町集落内には現在一四戸の合掌造り民家がある。旅番組や雑誌等で紹介されるから、非常に有名である。世界遺産のためか、外国人、特に中国からの観光ツアー客が非常に多く、集落内の案内に中国語表記がされている。実際、あちらこちらに中国人のツアー客が目についた。本日、私が宿泊する合掌造り民宿も、外国人可である。

まず最初に県の重要文化財明善寺郷土館（庫裏）から訪問する。白川郷も、五箇山と同様に浄土真宗の進行の盛んな地域で、この地に最初に浄土真宗の教えを広めたのは嘉念坊俊上である。この庫裏は二百年前の江戸末期に、飛騨高山の棟梁大工と地方の棟梁大工、正副棟梁が協和して三年かけて完成させた。



大きさが一際目立つ明善寺庫裏。展示物には説明書きがある。囲炉裏のある部屋。五箇山の合掌造りで内部公開をしている施設でも言えることだが、屋根裏に登る際には木製のはしごだけで登るのである。白川郷の施設は階段になっているけれども、一人一人がやっと登れるぐらいのスペースしか無く、両手できちんと上の足かけを握り、一步一步足元に注意し、他の見学者に気を使っているかと思わぬ事故の許である。女性、足腰の弱い方には注意を要する。また子供は親

が常に見ていた方が無難かもしれない。それからなるべく両手に何も持たない、首に何もかけないで登る方がいい。私は一眼レフカメラをケースごと肩にかけているから、五箇山でも白川郷でも、登る時には細心の注意を払う。

お昼になり、空腹になったため、近くにあった合掌造りの食事処山本屋で、飛騨牛の朴葉味噌定食を食べる。私は二〇〇三年に白川郷の民宿で朴葉味噌を食べる以来、病みつきになり、飛騨高山、白川郷を訪問した時は是非食べたくて、多少高くても我慢しているのである。

その後真つ直ぐ道なりに歩いて行くと次にふる郷長瀬家に到着する。入口の前に説明板があり、それによるとこの敷は五代当主民之助により明治二三年（一八九〇）に三年の歳月をかけ、当時の金額で八〇〇円かけて建造された。平成一三年（二〇〇一）の屋根の葺き替えはNHKが一年に渡り撮影放送され、結の精神を今に伝えた。当家のご先祖は加賀前田家の御典医で、前田家から拝領された品々も公開していると記されていた。



長瀬家の外観。御典医として使用していた薬箱。屋根裏の民具。

それから道を隔てて隣に民芸館神田家がある。この屋敷は江戸時代後期に石川県の宮大工によって十年の歳月をかけて建造されたといわれている。ここも他の家と同じく一階、中二階、一階が公開されている。内部を見て回る。中二階に囲炉裏の火を見るための小窓「火見窓」があるのが特徴である。またこの家は囲炉裏に実際に火を入れており、赤く燃えている。



神田家の外観。火が入れてある囲炉裏、それから二階に展示してある民具の数々。

神田家を見終わって、次は国重要文化財和田家に行く。旅行作家協会の世界遺産部会の部長、細田尚子様が、ご当主様と親しいと、私が入会した時におっしゃっていたのを知っていたから、白川郷に行くことがあったら、是非一度お会いしようと思っていたのである。こちらの和田家は天正元年（一五七三）に始まり、江戸時代は名主や組頭を務め、また一八世紀末からは牛首口留守所の責任者を任されたために苗字帯刀を許された。一七世紀から明治まではこの辺りで作られていた煙硝の製造と販売の権利で富を得て、当主は明治初代の村長だった。白川郷と五箇山が世界遺産に認定された一九九五年（平成七）に母屋、土蔵、便所が国の重要文化財に認定され、今まで紹介した施設と同様に今も住居の一部を公開している。

現在の当主で、和田家館長の和田正人氏は、すごく気さくな性格で、細田様の話で盛り上がった。二〇〇六年（平成一八）に有限会社化し、社長になった。



和田家の外観。部屋の一部。屋根裏部屋にある民具の一部。

和田正人氏にお礼の挨拶をしてから、次に本通り（荻町内を通っている車道のこと。五箇山方面に行くバスはここを走っている）に出て、お土産屋や飲食店の合掌造りが連なる道を、五箇山方面にしばらく歩くと「鄙」という喫茶店にたどり着く。

平屋に白壁、薪が置いてあるのと、「白川郷のオアシス空間 コーヒー屋 鄙」と書いてある木の看板が目に入る。中に入り、マスターの宇田様に、日本民家集落博物館の山城様の紹介で参りましたと告げたら、驚き懐かしがっていた。コーヒーとケーキをいただきながら白川郷に付いての話を伺った。この店を出てすぐの所に山道があり、それを登ると荻町城跡展望台に行くことができる。良く、テレビで白川郷を放送する時、必ず映し出される風景である。その山道は険しくて、幾ら若いからと言って油断しないようにと言われた。実際にこの後、店を出て展望台まで山道を歩いたが、四〇前の私でさえ、かなりきつい感じを受けた。足腰に自身のない高齢者には避けた方がいいかもしれないと思った。展望台か

ら降りて、本通りを今夜宿泊する民宿に向かって歩いていった時、何度か「展望台行き」と書かれ、沢山の人を乗せたマイクロボスを目にした。あの道のりを歩くのは、よほど足腰に自身がない限りは無理だろう。五箇山の相倉にも展望台があり、集落前の巨大駐車場の奥の畦道みたいな細道を歩いて登っていくが、相倉のそれよりはるかにきついのである。



喫茶店「鄙」。白壁と薪が目につく。有名な展望台からの眺めと、山を背景にそびえる合掌造り民家。

荻町内の公開古民家を見て回り、喫茶店に立ち寄り、かねてから見てみたいと思っていた展望台にも登れて、改めて白川郷をゆっくり見て回ることができた。

和田家の当主、和田正人様と鄙のマスター宇田章二様という顔見知りがあったため、来年以降、五箇山へ行く時は白川郷を経由して一日滞在し、和田家と鄙には立ち寄ろうと決意したのである。

追記。移築された荘川系合掌造り古民家。

横浜市の三溪園内に「矢筈原家」（やのはらげ）という合掌造り古民家が移築されていることを以前ある取材を通して知った。調べてみると、今回見てきた荘川系の合掌造りの古民家とのことなので、早速取材を申込み、旅行から帰宅した週の土曜日に取材に訪れた。

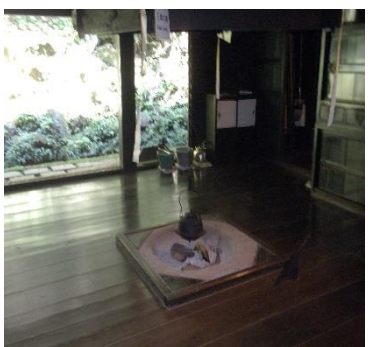
三溪園は、明治末から大正にかけて生糸貿易で財をなした横浜の実業家、原三溪（本名富太郎）、一八六八年（慶応四）～一九三九（昭和十四）が作り上げた広さ百七五〇〇平方メートルの日本庭園で、一九〇六年（明治三九）に公開された。一般公開された外苑と、三溪が私庭としていた内苑の二つからなり、

京都や鎌倉などから集められた十七棟の歴史的建造物と四季折々の自然が見事に調和した景観が見どころである。

原三溪の亡き後、関東大震災と戦災で四〇棟近くあった建物の半数が失われてしまい、その跡地に三つの建物を移築した。旧矢筈原家、燈明寺（とうみょうじ）本堂、林洞庵（りんどうあん）という茶室である。矢筈原家が当園に移築された理由は、原三溪自身が岐阜の出身であったことと、元々この場所に田舎屋という三溪自身が移築した古民家があったことによる。昭和三十五年（一九六〇年）に白川郷の方から、御母衣ダム建設のため、すでに当地にて重要文化財に指定されていた当家の行き先を探しているという話をうけて三溪園に落ち着き、同年に移築が完了した。

矢筈原家の祖先は岩瀬佐助であり、白川郷の豪農で、代々照蓮寺の寺領管理にあたり、寺務の相談にもあずかっていた。建物の屋根の妻側に「花頭窓」（かとうまど）火灯窓とも書く）がある。この様式は普通の民家にはつかないもので、元々禅宗ゆかりのものであったが、矢筈原家が東本願寺に多額の寄付をしたことで許可されたという言い伝えがある。矢筈原家は三溪園内で唯一の内部公開している。実際に見学客が来ており、中には外国人もいた。内部に展示してある古民具は約一〇〇〇点。飛騨の古物商から入手したものであり、昭和三四〜四〇年の間に買い取ったもので、なかなか入手できない貴重なものもある。

飛騨の三大長者といわれた矢筈原家の財力を示す歌が残っており、「宮で角助、平湯で与茂さ、岩瀬佐助のまねならぬ」というのがある。また別の歌に「一色甚助、北野の喜助、岩瀬佐助の真似ならぬ」というのもある。



花頭窓がある矢筈原家住宅。貴重な古民具。囲炉裏の部屋。

因みに三溪園内には野良猫が多く、動物写真家の岩合光昭氏の写真集でも紹介されたぐらいである。矢筈原家の敷地内にもトラ模様の猫が我が物顔で歩いていて、人が来て触っても恐れる気配も、逃げる気配もない。猫好きの訪問客に触られているのだろうか。なんて考えが頭をよぎった。

各種データ。

飛騨高山駅〜荘川の里間の濃飛バス時刻表、料金他。

濃飛バスHP <http://www.nouhibus.co.jp/> ↓乗り合いバス ↓荘川・牧戸線にPD
F化されております。

荘川の里

郵便番号 五〇一・五四一三 岐阜県高山市荘川町新渕五三

電話番号 〇五七六九・二・二六八一（荘川の里管理事務所）

開館期間 四月中旬〜十一月下旬。（十二月〜三月は休館）

定休日 毎週水曜日（祝日の場合は要確認）

入場料 大人四〇〇円 小人二〇〇円（小・中学生）団体割引（二五名様以上は
二割引き）

桜香の湯（おうかのゆ）

郵便番号 五〇一・五四一四 岐阜県高山市荘川町猿丸八二・一

電話番号 〇五七六九・二・二〇四四

FAX 〇五七六九・二・三〇五〇

営業時間 午前一〇時〜午後二〇時三〇分（最終受付は午後八時）

※季節により閉館時間を変更します。

休館日 毎週木曜日（祝日の場合、要確認） 一二月三〜一月一日。

入浴料 大人七〇〇円 小人三〇〇円（四〜一二歳未満）

障がい者六三〇円 三歳未満無料。貸切風呂は要予約。

濃飛バス荘川線「桜の里荘川前」。道の駅荘川内。

そばの里荘川

郵便番号 五〇一・五四一二 岐阜県高山市荘川町中畑六一

電話番号 〇五七六九・二・三一〇〇

FAX 〇五七六九・二・三一〇三

営業時間 午前十一時〜午後一五時（オーダーストップ 売り切れ次第終了）

定休日 毎週火曜日（祝日の場合要確認）

五月一六日、十二月三十一日、一月一日。

濃飛バス荘川線「そばの里荘川前」。

白川郷荻町 明善寺郷土館

郵便番号 五〇一・五六二七 岐阜県大野郡白川村荻町六九九。

電話番号 〇五七六九・六・一〇〇九

FAX 〇五七六九・六・一八五五
開館時間 四月～十一月 午前八時三〇分～午後一七時。
十二月～三月 午前九時～午後一六時。
入館料 大人三〇〇円 小中学生一〇〇円。
団体二五名以上 大人二四〇円 小人八〇円。

長瀬家

郵便番号 五〇一・五六二七 岐阜県大野郡白川村荻町八二三・二。
電話番号・FAX 〇五七六九・六・一〇四七
開館時間 午前九時～午後一七時。
入館料 大人三〇〇円 小学生一五〇円。
団体十五名以上 大人二百五〇円 小学生一五〇円。

和田家

郵便番号 五〇一・五六二七 岐阜県大野郡白川村荻町九九七
電話番号 〇五七六九・六・一〇五八。
FAX 〇五六七九・六・一〇五八。
開館時間 午前九時～午後十七時。
入館料 大人三百円 小人百五十円。
団体二五名以上 大人二五〇円。
身体障がい者 個人大人一五〇円。(本人のみ)

神田家

郵便番号 五〇一・五六二七 岐阜県大野郡白川村荻町七九六
電話番号 〇五七六九・六・一〇七二
FAX 〇五七六九・六・一七〇四
営業時間 午前九時～午後一七時。
休館日 不定期(但し十二月～二月、水曜定休)。
入館料 大人三〇〇円 小人一五〇円。

ホームページアドレス <http://kandahouse.web.fc2.com/>
メールアドレス kanda-ke@csc.jp

コーヒー屋「鄙」

郵便番号 五〇一・五六二七 岐阜県大野郡白川村荻町一一七八
電話番号 〇五七六九・六・一一五〇
営業時間 午前八時～午後一六時。

定休日 水曜日。第一・第三木曜日。

横浜「三溪園」

郵便番号 二三一・〇八二四 神奈川県横浜市中区本牧三之谷五八・一 公益財団法人 三溪園保勝会。

電話番号 〇四五・六二一・〇六三四・五

FAX 〇四五・六二四・六三四三

開園時間 午前九時～午後一七時まで（入場は一六時三〇分まで）

料金 大人五〇〇円 小人（小学生）二〇〇円

団体（二〇名以上） 一般二割引 学生五割引

六五歳以上の市内在住者と障がい者（市内市外とも）本人及び介護者一名まで無料。

ホームページアドレス <http://www.sankeien.or.jp>

アクセス 横浜駅東口二番乗り場から市バス八・一四八系統で本牧三溪園前下車・徒歩五分。

桜木町駅二番乗り場市バス八・一四八系統で二五分。本牧三溪園前下車・徒歩五分。

みなとみらい線元町中華街駅四番出口、山下町から市バス八・一四八系統で本牧三溪園前下車・徒歩五分。